

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Rhetoric at Work : A Discursive Approach to the Rhetorical Notion of Allegory

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2021-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: HIRAKAWA, Yuki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2550

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



1. 諸言 (Introduction)

相手に何かを伝えようとするとき、それを別の何かにたとえて言うことがある。例えば理科の教科書には、原子の構造を太陽系の構造になぞらえ、両者の類似をもとに原子の構造を説明するものがある。このようなたとえは、レトリックにおいて諷諭 (allegory) と呼ばれる。諷諭はことわざや寓話など、複数のディスコース・ジャンルの実現に利用される技法である。

本論文では、談話分析 (discourse analysis) の考え方と方法を用いて、諷諭の諸ジャンルを分析する。まず2章では、諷諭にまつわる先行研究とその問題点を明らかにする。具体的には、諷諭を使用の場から切り離れたテキストと見てきた先行研究に対し、一般的な会話においても諷諭が用いられ、そこでは諷諭が話し手の伝達行為に寄与するということを指摘する。そのうえで、これまでに指摘されてきた諷諭の諸ジャンル — 諷諭による議論、ことわざ、聖書のたとえ話、寓話 — を整理する。3章から6章では、2章で整理した諷諭ジャンルの分析を行う。各ジャンルのディスコースが示す特徴を詳らかにすると同時に、理論的・方法論的な議論も展開する。最後の7章では、それまでの考察を概観したうえで、本論文がレトリック研究として有する意義を主張する。

2. 諷諭の諸ジャンル概観 (Revealing Allegory: An Overview)

伝統的なレトリック研究において、*The Pilgrim's Progress* や *Gulliver's Travels* など、現実世界の出来事を写しとった物語が諷諭の典型とされてきた (佐藤, 1992b: 204)。他方、ことわざやイソップ寓話などのテキスト・ジャンルも、諷諭との関わりを指摘されている (Abrams, 1999: 5-8; ルブール, 2000: 81-85)。しかし、それらの下位ジャンルは互いを関連づけるかたちで整理されてはおらず、諷諭のカテゴリはまとまりのない雑多なテキストの集合であるかのような印象を与えている。この章では、各ジャンルの特徴を観察したうえで、諷諭のカテゴリを整理しなおすことを目的とする。

諷諭にまつわる先行研究は、一般的な会話においても諷諭が用いられるという重要な事実を見逃してきた。会話において、諷諭は対話相手との相互的なやりとりに根ざして利用される。話し手はたとえと本題とを明示的に対応づけ、その類似関係をもとに聞き手の説得を目指す。これらの特徴 — 類似性の提示と説得の指向 — を足がかりにすると、他の諷諭ジャンルに見通しのよい記述を与えることができる。ことわざ (proverb) は定型化した諷諭で、会話においては主として説得に利用される。類似性の発見は、聞き手の知識を前提として緩やかに促される。聖書のたとえ話 (parable) は語りを利用した書かれた諷諭である。登場人物である Jesus が、類似性の発見を通して目の前の聴衆を説得に導く。寓話 (fable) は語りの形態をとる、書きことばの諷諭である。書き手は類似性の発見を緩やかに促すが、説得を志向しない。寓意小説 (allegorical fiction) も書かれた語りによる諷諭である。ここでは、語られた物語が諷諭であるということ自体が、読み手の解釈に委ねられる。諷諭の下位ジャンルは、このように、類似性の提示と説得の指向のふたつの観点で互いに異なっている。

諷諭の諸ジャンルの整理は、会話における諷諭に目を向けることで可能になる。しかし、レトリック研究の長い歴史のなかで、相互的なやりとりに焦点を当てた研究はほとんど皆無である。

これは、レトリックが元来備えていた「説得のための技術」という側面からすると問題である(野内, 2002: 5-6; 柳澤・中村・香西, 2004: i-ii; ルブール, 2000: 12-13)。なぜなら、説得は本来的に対話で行われる行為で、目の前の聞き手に対して積極的に働きかける行為だからだ。対話のレトリックを等閑視することは、説得の技術たるレトリックが活躍する主要な場から目を逸らすことにほかならない。対話のレトリックに接近するには、話し手と聞き手のあいだでことばの働きを捉える談話分析(Johnstone, 2008: 2-3; 山口, 2009: 105-108)の手法が有用である。聞き手に対する働きかけを軸として本論が諷諭について示す結論は、レトリック研究における談話分析的なアプローチの有効性・重要性を示している。

3. 説得を目指すアナロジ：諷諭による議論 (Drawing an Analogy in Conversation: Allegorical Argumentation)

3章では、会話のやりとりにおける諷諭の使用に注目する。一般に諷諭は書かれた物語であると認識されており、先行研究でそれ以外の形態をとる諷諭に着目したものはほぼ皆無である。ことに会話においても諷諭が使用されるという事実は等閑視されてきた。その結果、会話のなかで諷諭がどのように使われるのか、いまだ詳らかではない。この章では、フィクションの会話を材料に、会話の場における諷諭を分析する。

相互的にことばを交わし合うなかで用いられる諷諭には、組み立て方が二通り存在する。一つは、話者が単独で一方的にたとえを組み立てる、独話的方法である。このやり方では、典型的には語り(narrative)の枠組みや、コピュラ文による隠喩(metaphor)および直喩(simile)が利用される。もう一つは、質問によって反応を引き出しながら会話相手を諷諭の構築に巻き込む、対話的方法である。これら二つの方法は、それらが利用される会話というディスコースの仕組みに根ざしている。会話には、(a) 発言の内容や構成が発話者の裁量に委ねられる(Johnstone, 2008: 157)、(b) 参与者同士の相互行為によって成立・展開する(Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974)、という二つの面がある。独話的方法はこのうち(a)を利用する方法である。発言権をもった話者が諷諭を繰り出せるのは、発話構築にかかる自由があるからにほかならない。他方、対話的方法は(b)を利用するやり方だ。ことばを交わす相手が存在して初めて成立するという点において、これは極めて相互行為的な諷諭の構築方法である。会話における諷諭の二つの実現方法は、このように、いずれも会話というディスコースの特徴に根ざすかたちで可能となっている。その一方で、独話的方法と対話的方法は、会話相手の説得に関して異なる特徴をもつ。独話的方法は、譬えを話者自身の手でひとまとめに提示するため、議論の方向を制御しつつ説得を目指せるという利点がある。他方、対話的方法は、相手の言質をとりながら説得にもちこむことを可能にする点で、議論・説得の方法として強力である。ただし、その反面、会話相手から狙いどおりの反応を引き出せるとは限らないため、これは同時に弱点ともなりうる。会話における諷諭構築の二つの方法は、レトリック技法としてこのように特徴づけられる。

会話における使用が等閑視されているという状況にあるのは、諷諭に限った話ではない。レトリック研究は、伝統的に、会話のやりとりに目を向けてこなかった。だが、会話という動的な現象を分析するための理論的・経験的な道具立ての発達に伴って、この会話を対象としたレトリック研究が広がりつつある(e.g., 杉本, 2014; 杉本・鍋島, 2015; 杉本ほか, 2017; Cameron, 2008, 2010, 2011; Musolff, 2004, 2011; Semino, 2008)。この章が諷諭について行なった分析は、そうした潮流の一部をなすものである。

4. 社会知の引用：ことわざ (Citing a Conventional Wisdom: Proverbs)

4章では会話におけることわざの用法を扱う。ことわざにまつわるこれまでの研究は、ことわざに複数の使い方があることを明らかにしてきた (Drew & Holt, 1988, 1998; Norrick, 1985: ch.2; Takeda, 1999b)。しかし実例を広く観察すると、既知の用法には当てはまらない使い方があることが分かる。この章では、従来の研究では触れられることのなかったことわざの新たな用法を記述する。そのうえで、先行研究で挙げられた他の用法との関連を明らかにする。

従来の研究では、目の前の事態をことわざに沿って把握する方法や、ことわざによって相手を説得する方法が記述されてきた。これらはいずれも、話者自身の捉え方や評価をことわざによって示す点で共通である。だが、ことわざは、話者が会話相手の主張に納得し、説得されたことを表明する際にも用いられる。従来の用法が話者の主体的行為としてのことわざ使用を捉えたものであるのに対し、この用法は他者の視座に基づくことわざの使用を捉えている点で、他者主体の用法と特徴づけられる。この新用法を含めると、会話におけることわざの使い方は、事態把握、意見の主張、意見の受容、の三種類に整理できる。これら三つは、それぞれ、会話の異なる側面と関わる。会話を進めるなかで、周囲の出来事に言及することもあるだろう。そこでことわざを用いるのが、事態把握用法である。会話ではまた、参加者同士が意見を交わし合うこともある。その場合、自分が相手を説得しようとする場合もあれば、相手の意見に納得したと認めることもある。前者にことわざを用いるのが主張用法、後者が受容用法である。会話におけることわざの用法の三用法は、いずれも会話というディスコースに根ざして発達しているのだ。

受容用法の存在は、レトリックの新たな可能性を拓く。レトリック研究は伝統的に、相手をどう説得するかに焦点を当ててきた。だが、会話という活動には、相手のことばを受け止めるという側面も本質的に備わっている。とすると、他者のことばの受け止め方にも技術を見出せるはずだ。ことわざの受容用法は、そのような技術の一つと位置づけられる。

5. 語りによる教え：聖書のたとえ話 (Narrating a Story to Teach: Parables)

5章では聖書のたとえ話の分析を行う。新約聖書の最初の三書である共観福音書 (the Synoptic Gospels) では、Jesus が様々な人々に教えを伝える場面が描かれる。自らの教えを伝える際、Jesus は直接的な解説を行わず、しばしばたとえ話を利用する。この章では、たとえ話がどのように組み立てられているか、そしてその構成が読者に対してどのような効果を与えるかを明らかにする。

Jesus のたとえ話には、個別に程度の差は認められるものの、概して伝道のトピックとの関連が十分に明示されない、という特徴がある。加えて、彼が他の登場人物とやりとりする場面は、一貫して黙説（ことばを最後まで続けず、途中で中断する技法；Lanham, 1991: 20）を使用しながら描かれる。つまり、彼のことが会話相手にどう受け止められたのかが示されず、やりとりが常に Jesus のことばで閉じるかたちで描写が行われるのである。この描写方法は、Jesus のたとえ話をどのように受け止めればよいのか、彼が伝えようとしていることは何か、という「謎」を読者に提示する。この謎は、しかし、単なる「わかりにくさ」ではない。読者との関係を結ぶレトリカルな役割を果たしている。第一に、会話の終結部にたとえ話を配置することは、Jesus のことばが反論などの否定的反応を受けなかったことを示唆し、（積極的なやり方ではないものの）彼の考えの正しさを示すことにつながる。これはさらに、Jesus を権威づけることにもなる。第二に、たとえ話の要点を見えにくくすること、そしてそれをどう受け止めるべきかについての指針を与えないことは、彼のことが何を意図しているのかについて、読者自身に考えさせる契機となる。

これは、キリスト教の核たる Jesus の教えを、効果的に読者に差し向ける方法として有効である。こうして、Jesus のたとえ話に謎を残すことを通して、福音書は読者との緊密な関係を結んでいるのだ。

聖書のたとえ話の分析は、レトリックの役割について新たな洞察をもたらす。一般にレトリックは、自らの認識を相手に伝え、説得を成功させる手立てとされている（佐藤, 1992a, 1992b; 香西, 2016）。言い換えれば、自らの思いや主張を相手によく理解させることがレトリック使用の効果であり眼目だ、というわけである。他方、聖書のたとえ話が読者に対して果たす機能は、明確な理解を阻むことによって成し遂げられている。理解の障害が一定の効果をもつとすれば、それも一つのレトリックと見てよいだろう。5章の分析は、このことを明らかにしている。

6. 教訓を例示する語り：寓話 (Exemplifying a Moral Lesson with a Narrative: Fables)

6章では寓話の構造に焦点を当てる。伝統的なレトリック研究によると、寓話は教訓を例示する語り (narrative) である (Abrams, 1985: 6; Cuddon, 1980: 256; Lanham, 1991: 77; Perry, 2007: ix; Shaw, 1972: 154)。従来の記述によると、寓話の教訓は語りの末尾で述べられる。だが、実際の寓話は他の構造もとる (Preminger & Brogan, 1993: 400)。語りに先立って教訓が示されることもある。語りの前後で教訓が繰り返される場合もある。さらに、語りの内部で登場人物が教訓をほめかすこともある。この章では、教訓を例示する寓話の構造多様性が、書きことばのコンテクストに根差していることを明らかにする。

会話のやりとりのなかで成し遂げられる例示には、一定の基本的構造が認められる (Müller & Di Luzoi, 1995)。会話の場合、当座の相互行為における関連性を明らかにしながら語りを開始・終了することが期待される (Jefferson, 1978; Labov, 1972)。そのため、主張を支える具体例を語るなら、基本的にその主張との関連を示すことが求められる。会話での例示がもつ構造は、つまり、会話の相互行為に係留しながら主張を語りで根拠づけること (つまり語りによって例示を行うこと) それ自体に動機づけられている。語りによって例示を行なう点で、寓話は会話での例示と軌を一にする。そのため、例示の組み立てに同じ方法が利用可能となる。他方、寓話は書きことばのディスコースであるという点で、会話での例示と異なる。会話の場合と違い、書きことばでは当座の相互行為に係留しながら例示を行う必要がない。例示に先行／後続する相互行為がそもそも存在しないため、「当座の相互行為との関連性を例示の前後で明かすべき」という制約を受けない。したがって、書きことばのディスコースである寓話では、例示の手順を省略できる。教訓を語りの前後片方だけに置く構造や、語り内の登場人物に仄めかさせる構造は、この制約の不在によって可能になっている。寓話の構造が多様なのは、寓話が書きことばのディスコースであるからなのだ。

レトリック研究は、様々な表現技法を収集・体系化してきた (Cockcroft et al., 2014; Corbett & Connors, 1999; Lanham, 1991; Walton, 1996)。その一方で、同一の技法が異なるディスコースにおいてどう使いこなされるかを比較した研究は見あたらない。だが、レトリックが認識や表現、そして説得の技術であるならば、それらは使用場面に応じて柔軟に使用されることもあるはずだ。寓話 — 書きことばにおける例示 — の多様性が示しているのは、まさにこの柔軟性にほかならない。

7. 結言 (Conclusion)

7章では、3章から6章までの具体的な分析・議論をもとに、本研究が有する理論的・方法論的な意義を示す。諷諭それ自体は、これまでも様々な考察の対象となってきた。本論はそれらの研究に連なるものとして位置づけられる。しかし、この技法への接近に談話分析の考え方と方法を導入する点で、本論は従来のレトリック研究と大きく異なっている。実際の使用場面における技法の振る舞いに着目するという談話分析の考え方および分析手法は、これまでは書きことばのテキストに目を向けがちであったレトリック研究の新たな方向性を示すものでもある。レトリック研究の方向性に関する議論は、さらに、「レトリック」という概念そのものについての再考をも促す。アリストテレスの時代から、実に多くの論者が、様々な分野においてレトリックを論じてきた。だがその際、「レトリック」は概して個別の技法、ないしはそれらの体系を指す概念として利用されることが多い。しかしながら、実際の使用においては、技法を用いたからといって、それによって直ちにレトリカルな効果が発生するわけではない。レトリックがレトリックとして機能するためには、聞き手ないし読み手の側が、技法の使用をまさに「レトリカルなもの」と受けとらなければならない。つまり、レトリックはあくまでも使用の場で立ち現れるだ。こうして、この最後の章では、レトリックに対する新たな見方を提示する。